
君とみた空

花野 菜仔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君とみた空

【Nコード】

N93220

【作者名】

花野 菜仔

【あらすじ】

5歳の時に父を失い、10歳の時に母を失った、主人公 東雲 波美。

両親の幼馴染である、北山 詩織に育てられることとなった。病弱な詩織の入退院の繰り返しでお金が尽きてしまう。

隣に引っ越してきたのは、楠ジュエリーの長男、

楠木 愁馬だった。

「食事を毎日作れ。作ったらお金を振り込むわ」

波美は愁馬の為に食事を作ることを決めた。

高校生になり詩織の様態が悪化。

愁馬と母・・・愁馬と詩織の関係が

次々と暴かれるようになり・・・

プロローグ（前書き）

君の隣にいた時間は6年あまり・・・。
でも君の中にいるママには勝てなかった。

なぜ、私が恋したのは、愁で・・・。

愁の好きな人は、ママなの？

プロローグ

「Excuse me?」

「Yes?」

「Is this Kawase Company?」

「Yes.」

「Thank you.」

「You're welcome.」

このN・Yで生活するようになり、もう、どれぐらいの時間がたつただろうか？

川瀬カンパニーで働くようになり、ケントと付き合いようになつて・・・。

ぼのぼのとそんなことを考えてみた。

だって今日の空がとっても綺麗なんだもん。

空が綺麗な日は、きつとママとカカと、パパが微笑んでる日。

3人に私は頑張ってるよ・・・って伝えたいんだ。

再会

『今日はありがとうございました。』

「そんなこといいんだよ。」

波美ちゃんは、もう家の人間そのものなんだから。」

『お父様ありがとうございます』

「波美ちゃんは本当にいい子だなあ。健斗のお嫁さんには勿体無いくらいだよ」

『お父様つたら口がお上手なんですから』

「波美、家帰るぞ。親父も引き止めるな」

『あらまあ。お父様では、また来ます』

「波美ちゃん、健斗ナシでも、家に来てくれな」

『ええ。では』

- - - ガラガラガラ

川瀬の家のドアを閉める。

NYだというのに、この日本風で出来たこの家を見るたび、日本に帰りたくなる。

川瀬家のお父様は相変わらずなお調子で、いつもと変わらず優しくして下さる。

川瀬のお父様は、父親を知らない私にとって、本当の父親のような存在である。

『健斗はいいなあ』

「何が？」

『だって、あんないお父様がいらっしやるじゃん』

「あの親父だって、お前には優しいけれど、オレには昔から変わら

「ず怖いぞ」

『アハハハ』

「ほら、寒いし早く車に乗ろう」
『そうね』

車に乗り込んだ私に、健斗は

「なあ聞いてもいいか？」

『何を？』

「お前の今までの恋愛を」

『聞いてどうするの？』

「聞いたら・・・それは内緒」

『健斗には言いたくない』

「いいじゃん。夫だぞ」

『そうだけど・・・』

「はい決定。教えて」

『わかったよ』

私はほんのり暖かい車内に声を響かせた。

『私が好きになったことがある人は一人』

「それだけ？」

『うん。まあねえ』

「恋愛つたのか？」

『それは・・・いいじゃん。過去だし。健斗こそ、どうなのよ？』

「オレは、お前が最初なんですけど。初恋」

『マチ？』

「おお。オレって結構運いいよなあ。初恋の人と恋が実って結婚できるとから」

『そうだね』

「ちなみに、その恋いつの時？」

『高校2〜3年の時だったかな？』

「そっかあ。じゃあ家に帰るか」

『うん』

健斗の目をじいっと見つめながら、愁を思い出した。

愁は今頃なにをしているのだろうか？

愁は家を継いだかな？まだ教師をしているかな？

愁「ご飯ちゃんと作れてるかな？ああ彼女とか出来たのかな？

もしかして結婚してる？パパとか呼ばれたりして・・・。

気がついたら涙があふれていた。

「波美・・・どうした？」

『なんでもないよ』

「なんでもなくないから」

『本当に大丈夫だから。あら、ついたね。降りなくっちゃ』

「おい波美！！！」

「ごめんさつき変なこと聞いたから。もう聞かないから。ごめんな」
私は健斗の胸に抱きついた。

『・・・愁・・・』

「・・・愁・・・」

「お前さあ何泣いてるわけ？」

私が振り返ると、目の前にいたのは・・・。

あの日と何も変わらない姿で笑顔でいる。

『愁・・・なんで・・・』

私の目の前にいたのは、楠木 愁馬だった。

あの日、日本置き去りにしてきた気持ちのふたが外れてくる。

「はじめまして。楠木 愁馬です」

「ああはじめまして。波美の婚約者の川瀬 健斗と申します」

「波美 あの川瀬カンパニーの御曹司と、結婚すんのか？」

『まあね……。でも愁には関係ないでしょう？』

「どうしてココに来たの？」

「何でだろう……。気がついたらココにいた。」

『冗談は大概にしてちょうだい』

「波美が元気ならそれでかまわない。でも……」

結婚するならオレの名前もう呼ぶなよ」

『愁……』

「呼ぶなって言ってるんだろ？わかんねーの？」

『わかってる。愁……カカとママとパパのことよろしくね』

「おう」

これがこれからの悲劇につながるなんて思わなかった。

彼の姿

あれから数日が経ち、私たちは新居へと引っ越した。もちろんネームプレートには、川瀬の文字が刻印されている。

「荷物は全て運び終わりました。何か運び忘れがあるものはありませんか？」

「いいえ。大丈夫です。ありがとうございました」

「いえいえ。でわ。」

『ありがとうございます』

私たちは引越し業者に礼をいった。

健斗はソファーに腰掛ける。

私はキッチンに手に立ちながら、紅茶を入れる。

このキッチンは、何処か前に力カと住んでいたマンションのキッチンとよく似ていた。

『紅茶入ったよ。こっちに来てくれない？』

「おう。」

私は健斗の前に紅茶を置く。

「波美」

『ん？』

「お前の初恋の人ってさあ」

『またその話？』

「ああ。お前の初恋の人ってさあ」

『うん』

「この間親父の家から帰るときにいた男だよな？」

『……………』

「楠木 愁馬クンだよな？」

『……………』

「愁馬くんはどんな人だった？」

「バカで自分勝手に料理が出来なくて、困ってる人をほっとけなくて、」

「意地悪で優しくなくって、空が大好きな人だった」

「じゃあオレはどんな人？」

「優しくって、周りに気配りが出来て、料理が上手で、頭が良くて、笑顔いっぱいな人・・・じゃないかな」

「それってほめてくれてる？」

「うん。」

健斗どうしたの？」

「別にどうもしてないけど・・・」

「そう。それなら良かった」

「なあ教えてくれないか？」

「何を？」

「波美の生きてきた人生を・・・。」

「何で？」

「だってオレの人生知ってるのにお前だけずるいじゃんか」

「そうか・・・わかった」

私は目を閉じて反芻するんだ。

日本に捨ててきた自分を・・・。

母の死

「波美、今日は授業参観でしょう？」

『そうだけど・・・』

「じゃあママ学校早く切り上げて学校へ向かうね」

『いいの？』

「もちろん。波美の授業でがんばっているところみたいものね」

『やったあ』

「おつと学校行く前に忘れずにパパのところ行って来なさい」

『うん。』

私の名前は東雲 波美 小学五年生。

小さい頃に病気でパパが死んで、ママと二人で今日まで生きてきた。ママは優しくして気丈でなんでも出来る人。

高校の教師をしていて、忙しい人だ。

小さい頃にパパと過ごした記憶なんていくつか数えられるほどしかない。

だから時々ママはパパの話をしてくれるんだ。

パパはママの幼馴染で、パパとママと詩織さんという人と三人で仲が良かったこと・・・。

ママの話は面白くていつも笑ってしまうんだ。

『今日ねママが来てくれるの』

「そう。うれしいわね」

『うん』

母の昔からの知り合いの北山 詩織に笑顔で話す。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9322o/>

君とみた空

2011年10月8日08時33分発行